心理学講座たより

「心理学講座」第8回配本附録　東京都神田局區内神保町2の24　電車通り　株式會社　中山書店

田中寛一博士ならびに小保内虎夫博士を日本学術会議員に推薦す

日本応用心理学会
日本心理学会

このたび、日本学術会議員の第三回選挙が行われるに当り、学問の自由を守り、学術の発展を期すべき重責を担う学術会議員候補者として、日本応用心理学会が田中寛一（全国区一部）博士を、日本心理学会・日本応用心理学会が小保内虎夫（関東地方区一部）博士を推薦するを得ましたことは、われわれ会員の等しく誇りとし、喜びとするところであります。日本応用心理学会は御承知のとおり、心理学講座の編纂者でもありますので、此処に両博士の推薦の言葉を述べさせていただきます。

田中博士は周知のように田中B式知能検査の著者として古くから一般に知られている我が国有数の心理学者でありまして、東洋民族の比較研究によってその声望は遠く欧米にも鳴り響いております。その豊かで温厚な御風貌と御円満な人格とは多くの門下生に敬慕され、齢すでに古稀に達せられるにも拘らず、今なお矍鑠として著作に文化活動に熱情を傾けていられますことは、われわれのひとしく敬服するところであります。また日本学術会議の創設以来、その会員として広く一般に学術振興のために尽力されています。われわれは同博士の円熟された手腕と御活動とに期待するところますます大であると言わなければなりません。

小保内博士は、このたび博士御自身の固い御辞退にも拘らず、日本心理学会、日本応用心理学会の要望もだしがたく、その推薦を御承諾になり、始めて立候補されました。博士の両学会の幹部として、学界の向上発展のため尽された年来の誠意と実行力とは、学会におけるエネルギッシュな多角的な研究発表と相俟つてあまねく人の知るところであります。博士の独自の立場からなされた感応理論の研究は、博士の卓抜な独創と終始変らざる不撓不屈の研究心によって貫ぬかれた成果でありまして、その学界への貢献は、博士の学者としての節操、高潔な人格と共にわれわれの日頃つねに畏敬するところであります。また博士は、教育大教育学部教授として、実際的な活動を通じ、広い視野に立つ識見をひろくわが国教育学界、教育界のため、惜しみなく生かすことに砕心されています。博士の学界、教育界のために示されてきた誠実と実行力とは、新風を待望する危機に立つ今期学術会議員としてもっともふさわしいと信じます。ここに田中、小保内両博士を日本学術会議員候補者として推挙し、皆様の御賛同と御支援とをお願致す次第であります。

"キンゼイ報告"の意味するもの

―その学術的価値について―

杉靖三郎

キンゼイの新著「人間女性の性行動」が出版されるというので、ジャーナリズムで問題になり、わが国でも、すでに新聞雑誌で「とりあげ」ずみである。

これは、単なるジャーナリズムや、一般大衆の「未知なる人間面」への好奇心というだけに終るべく、あまりにも意味のふかい学問的なものである。その研究の立場、方法、結果というものは、生物学、生理学、心理学ひいては社会学まで、もろもろの学問とつながる重大なもので、この方面にたずさわる人々の一応、まじめにとりあげなければならないものと思う。

×

性行動は、動物の種族本能の必然的な現われとみられるが、人においては、社会的な歴史的な、そして個人的なデリケートなニュアンスをもつ"行動"そして、動物の本能的行動とは、はるかにかけはなれたものと考えられていた。

ところが、一九二〇―三〇年代になってホルモンの本体が明かにされ、単なる一化学物質が、人および動物の生命活動に対して、深甚な影響をおよぼすことがわかった。人の行為も、つまりは、意識以外の内在性の必然によっておこるものだと考えて、オルダス・ハックスリは、男女を肉体的慾望のとりことしてえがいた。またD・H・ローレンス(「チャタレイ夫人」の著者)は、人間は本能のとりこであり、肉体の衝動にかられる生物であるとして、説いた。

これらは、むろん科学的な記述でもなく、また科学的なものとしてとりあげるべき性質のものでもないが、時代的思潮の展望をなす一つの拠りどころにはなろう。

×

それはともかくとして、J・B・ワトソンおよび行動主義派では、心理学の重点を「行動」におき、行動を環境の影響に対する感応とみなすのである。その感応には、膝をうてばピンとはねかえるような簡単なものから、また記憶回想(ずれた感応)によって変更されたり、あるいは間接なつながりをもつ状況によって「条件づけられたり」するような複雑なものまで、いろいろあるが、とにかく「環境の影響」を強調するのである。

また、行動の基礎になる神経系の構造および機能的なパタンの形成(神経成熟―本講座第九回配本参照)についても、学習的なものと発生的なものとが対立しているが、いわば前者は、環境(後天的)に重きをおくものであり、後者は生得(先天的)が根源であるとするものである。これはまた、機能が構造を決定するか、構造が機能を決定するか、という問題ともつながり、考えの上からはどちらでも説明はついたのだが、生物学的(発生力学的)、生理学的、解剖学的な刻明な実験をたどつて行くとき、そこ

に、生物本来の内在的な発生力というものが大きく浮び上がって来たのである。

このようにして、環境とか社会とかの影響はどのようにして及んでくるか、というメカニズムに立入ってくると、ただ環境の影響といったのでは、とりとめのない考え方にすぎなくなってくる。

×

このように考えてくるとキンゼイの〃女性篇〃は、環境的、社会的な影響をデリケートに反映している。個性的なものと、もっぱら考えられていたことが、実は、一つ一つとりあげて集積、累計してみると、環境や伝統に支配された人間独特と思われた「性のビヘビヤ」も案外、生物的な本能の根を深く内にはったものであり、神経の機構、ホルモンの相関による、或る物の〃必然〃の上におかれていることを示唆させるのである。

今、一々について述べるいとまはないが、その一つ一つのデータ自身にも今まで考えられていたのとは異る事実が数多くあるのである。

たとえば、女性の性的成熟は、月経よりはるかにおくれて二十才すぎてからであり、マキシコムは三十才から四十才であり、五十才過ぎてもなおおとろえない。性交以外の性的放出（outlet）のうち、petting と onanie がもっとも多い。orgasm のときの解剖学的・生理学的変化は、男性の場合と案外によく似ていて、符節の一致がみられる。

それから、刺激としては、男性が、見たり聞いたり、とにかくその方面に関する限り何からでも興奮に導かれ、多分に、"psycho-sexual" であるに対して、女性では閾値が高く、一種の adequate 性があり、はるかに "physical" でなければ反応しないのである。だから女性は異性の nude や〃絵〃をみても感興はわかない。女性には〃出歯亀〃はいない、fetishism も sex fantasies もみな男性のものである、という。また女性は暗闇をこのみ、視覚・聴覚を除いて〃官能的〃刺激をもとめる。

その他、種々の調査を全面的に綜合して（whole approach to sex）、つまりは、女性は男性に比して性的刺激閾値が高く、フィジカルなものに対して選択的に反応する。したがって単なる psychological な刺激ではダメであって intercourse の途中で、性以外のことに注意がそれがちである（これがよく男性側から誤解されて離婚の理由にあげられる）、これはネコでも雌ネコは性交中にネズミがくれば追っかけることとよく似ているという。

そのほか上にあげた事柄は、これを生物のそれらと比較し、彼一流の系統発生的な研究（彼はすでに動物の性行動に対して十五年以上専心している）と対決してみると、ピタリと符節を合わすというのである。

彼は、結論として、〃人間関係〃の言語にしばられていては、人間の本然の姿は出てこない。系統発生的にうけつがれたものの部分であるような性的行動は、人間的でないとか、自然に反するとか、アブノーマルである、とかいって片付けるべきでないともいう。また、動物の行動と比較することが、反社会的であるとか、非道徳的だとかいうが、むしろかかることにかくれて放置することは、自然科学者としてその責任を裏切るものだ、とさえいっている。

そして、正しい人間の結婚は、この本然的な男女の性的相違の上にこそ、適応させ築かれてゆくべきである。もしその相違が根本的にどうにもならないものなら、それ

と闘うどころか、否定することさえも無意味であろう。しかし、人間の幸福は少くとも、むしろこの相違に互に適応してゆく方向にあるのでなければならない。それは困難かも知れない。しかし、これは〝恋愛〟に対して荷なうべき当然の重荷であろう、と結んでいる。

×

とにかく、実態調査的な研究態度の下に、広い視野をもった人類に発現している性の事象を、生まのままとらえた一々のデータには何らかの学問的価値があると思う。それは、或る人が指摘しているように、若干の統計的技術の面で操作の不十分なところがあるにせよ、学術体系の中で分析研究しているところに大きな業績を認めざるをえない。そして性問題を、社会と個人との調整にあることを明らかにしたことは高く評価されてよいと思う。

したがって、この報告は、ジャーナリズムにまかすのでなく、専門分野の人々がまともにとりあげるべき重要な研究課題であると信ずる。

（教育大教授・医学博士）

昭和28年度

毎日出版文化賞受賞

生物学大系

（全8巻）

三重県大水産學部長 理學博士 岡田彌一郎

教育大教授 醫學博士 杉靖三郎

東大教授 理學博士 沼野井春雄

教育大教授 理學博士 三輪知雄

慶島大教授 阿部余四男

お茶の水女子大教授 理學博士 大槻虎男 修

奈良女子大教授 理學博士 小清水卓二 監

東大教授・農場長 農學博士 野口彌吉 体

第1巻・無脊椎動物 第5巻・人

第2巻・脊椎動物 第6巻・天然資源の利用と保護

第3巻・植物 第7巻・生態・環境・適応

第4巻・植物、動物の生理 第8巻・細胞・遺伝・進化

各巻〒1200 〒85

小社は、昨年度も「生理学講座」の上に、毎日出版文化賞を受賞致しましたが、ここに本年度もふたたび、「生物学大系」が、自然科学部門中の唯一のものとして、受賞の栄誉をかちえました。

ことごとく御支援によります賜物でございまして、謹んで御礼申上げます。

本大系は、人間の幸福に、本当に役に立つ〝生命の科学〟としての生物学を、大図鑑的な常備書として刊行した画期的な企てで、とくに小学校、中学校、高等学校の図書室には、まことに好適なものでございます。

なにとぞ、この機会に、関係方面におすすめくださいますよう、お願い申上げます。

【内容見本進呈】

心理学茶話

武政太郎

① 心の問題は、これをいろいろの方面から研究することができます。哲学も、文芸も、倫理学も、社会学も、宗教も、多かれ少かれ心の問題を取扱っています。心理学は、心の問題を科学的に解決しようとしていますが、しかしそこで解決されたものは、心の問題の一部分に過ぎません。

科学的に心の問題を取扱うためには、まず直接経験によって対象をとらえ、それを一定の若干の原理あるいは根本仮説から体系化を試みるのであります。そして、このような根本仮説にも、第一次的なものと、第二次的なものとが考えられるようです。そしてこのような根本仮説が異ると、異った体系の心理学ができます。

② 物理学はもちろん生物学も、生成発展せる過程を時間の流れから切りはなして、これを空間的に措定し、体系化しています。心理学もこれと同じものです。変化生成やまない意識も行動もすべて空間的なすがたにおきかえられています。これが現代心理学の「すがた」(相)です。

③ どういう根本仮説を考えたらよいか、これは心理学を専攻しようとする者のなやみです。現代の心理学では、対象が非常に広くなっています。原生動物から後生動物はもちろん人間動物にまで、その研究対象が及んでいます。したがって、心理学は生物科学にも、社会科学にも、それぞれある領域をもっています。

心理学の第一次的根本仮説を生命原理に求めるとすると、それはどういうことになるでしょうか。「生きる」ということの原動力を仮りて「生きんとする衝動」と名づけたらどうでしょう。これは、自然的生理的な根本要求の突発であるとも考えられます。あらゆる行動も認識も、生きんとする要求から発する衝動と考えられます。聴こうとおもわないのに「雀の鳴き声がきえる、見ようとしないのに、秋の夜の月が美しく眼底にやどる、これは心が不生にして「霊明」なものだからだと、盤珪和尚は信じこまれたようです。しかし、私からみると、心構えのとりかたでは、雲雀のさえずりも、雀のねぐら騒ぎもきこえぬこともあるから、宗教的に心の霊明というような仮説によらないでも、生きるための認識衝動の一つと考えてよさそうです。ところが、人間の生活は、自然的根本的要求のままに生きるだけに留まらないで、要求の対象の一定化とそれにたいする執着とがあります。発達心理学的に考えると、人間の心のはたらきの第一次的根本仮説には「生きんとする意志」が考えられます。自覚と自己抑制とをひきおこす動力は、これを意志と名づくべきものです。そして、このような意志が、反省とか省察とかといったような思考及び創作の原動力となり、文化生産、文化生活の原動力となっていると考えられます。自分の心の「すがた」を求めて苦悶するということは、「生きんとする衝動」からはあらわれません。したがって、たんなる衝動生活からは、哲学も文芸も宗教も科学もあらわれません。

④ 一個の生物としても、人間としても、個の生活、個の存在は、「環境」という生活の場に包まれています。Arganism in-environ ment (環境内存在としての生体)の根本仮説は、もはや今日の生物学や心理学では、何人も異議を唱えないでしょう。ところが、動物では、その環境が、ただ自然であるのに、人間は、ただの自然のほかに、社会があります。自然的環境のほかに社会的環境があるということから、人間心理学には特殊な様相を考えねばなりません。たんなる群生活ではなく社会生活があるということは、人間心理学の体系が社会科学となり、そこに社会原理が要請されることになります。

⑤ かような根拠に立って、さらに心理学的対象の体系化の第二次的根本仮説を考えると、(一)刺激—生体—反応(その共通概念は行動)(二)適応(これは環境認識、学習、傾性(性格などの原理)(三)発展と保

読者のページ

内容に就いては権威のある立派なものであって、心理学百科辞典的存在と云っても過言ではないと思いますが、読者側の立場から敢えていわせていただきますと、分冊をもう少し項目別にまとめて配本していただいた方がより読み易くなると思います。

福岡市西新町西南学院中学校教諭　石原　一男

私のように学窓を去つて未だ日の浅いものには、何かと学校の事が気にかかって、何か勉強したいと思っていた時に、本講座の発行は、私の何か満たされぬ気持を満足させてくれました。第一回から予約講読をして居りますが、その充実した内容は毎回私の生活に思い当る問題を提供して呉れ、深く考えさせられます。発行関係者各位の熱意に感謝致して居ります。

北海道札幌郡江別町　公務員　谷口秀男

各単元ごとに分冊したことは非常によいと思います。毎回新らしい企画には感心して居ります。

新潟県北魚沼郡川井村　農業改良普及員　池田　万平

社会生活の各部門の事象を心理学的に分析せんとする広範囲な編集企画は、他に類のない見事なものだと思いますが次のような項目も是非入れていただきたいと望みます。○人工脳○広告心理学○催眠術の施術方法など。

東京都中野区鷺宮　会社顧問　上田光洋

今までに発行されている多くの心理学書よりも私には興味と知識を与えてくれた点は全く心から感謝致して居ります。希望を述べさせていただくとすれば、第七回の読者ページにもございましたが、出来れば体裁にかまわずに、必要な文章丈でも横書きにしていただきたいと思っています。

呉市上長迫町　インターン生　信藤　弘

編集部より

中秋の候、読者の皆様には燈下に親しまれ、いよいよ御研鑽に拍車をかけておられることと存じます。このたび日本応用心理学会の推薦候補者として、この講座に最も関係の深い、田中寛一博士とつねにこの講座の陣頭指揮をとって下さる小保内虎夫博士が日本学術会議員に立候補されました。両博士の御健闘を読者の皆様とお祈りいたしたいと存じます。（心理学講座編集部）

（5頁よりつづく）

存及び退化、いいかえると心身の機能変化、(四)社会（動物では、自然的な群生化であるが人間では、共通目標の認識、共通の理解、共働などによる社会生活が考えられる教育の原動力もここにある）などの基本観念となるでしょう。

このような基本概念によって、私は一つの人間心理学の体系を考えているのであります。そして、これらの仮説を現代の生物学の仮説を比較していただきたいのです。

（文学博士）

心理学講座

＝第八回配本＝内容

ゲシタルト派	東大名誉教授	千輪　浩
フランス学派	工大教授 医学博士	宮城音弥
情意実験法	慶大教授	横山松三郎
神経成熟	教育大教授 医学博士	杉靖三郎
世論	教育大講師 医学博士	田中英彦
経営	東大助教授	池内　一
比較教育法	日本油脂 専務理事	伊吹山太郎
道徳	教育大教授	大浦　猛
心理統計技術(Ⅱ)	東大助教授	古川哲史
	慶大講師	印東太郎